

INFORMATION AND KNOWLEDGE NEWS

情報知識学会ニュースレター

1994 4.1

25

情報知識学会事務局 発行 千110 東京都台東区台東1-5-1 (凸版印刷株内) TEL03(3835)5692 FAX03(3835)0824 ISSN0915 1133

Windowsのもたらしたもの、もたらすもの

明海大学外国語学部英米語学科
渡辺 雅仁

マイクロソフトWindowsの登場は、パーソナルコンピューティングの世界にさまな変革をもたらした。Windowsを使用してまず感じることは、その操作性の良さである。

ワードプロセッサのMS-Wordに慣れると、表計算ソフトExcelやプログラミング言語Visual Basicへとスムーズに移行することができる。Windowsのシステムが、アプリケーションの違いを越えて、統一的に利用できる機能を豊かに供給しているからである。Windowsでは、利用度の高い操作を、アイコンやツールボタンと呼ばれる図形シンボルをマウスでクリックすることにより実行することができる。これらの図形シンボルの主だったものは、複数のアプリケーションで採用され、同一の機能を果たす。さらに、標準的なメニュー構造や、ダイアログボックスというパラメータ入力画面も共通なものが現れる。共通部分が多くなればなるほど、アプリケーションを利用する際に新たに学ばなければならないことが少なくなる。直感的な操作が可能となるのである。

Excelで作成した表と、ペイントブラシで作成した図形を、MS-Wordに組み込み、解説の文章を入力する、といったことが簡単にできるようになった。これは、Windowsの用意する、クリップボード、OLE (Object Linking and Embedding)、DDE (Dynamic Data Exchange) といった、データやオブジェクトを受け渡しする機能によるものである。アプリケーションの統合性が高まったのである。

WindowsのワードプロセッサやDTPでは、True Typeとよばれるスケーラブル・フォントや、解像度の高いディスプレイを利用することにより、行と行の幅、イタリックやボールドなどの字体、活字の大きさなど、ほぼ印字した結果そのものをディスプレイで確認しながら操作することができる。WYSIWYG (What You See Is What You Get) 環境が実現されているのである。

こういった操作性の良さは、マルチタスクを実現する高度なメモリーや補助記憶装置の管理があってこそのことである。

(次頁へ)

目 次

Windowsのもたらしたもの、もたらすもの	1	英語コーパス研究会活動報告	12
醍醐寺の文化財とそのデータベース	3	平成6年情報知識学会	
情報化社会における一つの試み—駿河台		総会・研究発表会プログラム	13
大学文化情報学部のコネプト	4	FID 国際会議	14
情報の定義：情報とはInformationか		人文科学とコンピュータ研究会	15
Intelligenceか	6	学会カレンダー	16
国際情報ドキュメンテーション連盟			
国際会議特別部会「記録史料管理」	10		

Windowsは単なる使い勝手の良いシステムにとどまらず、周辺の状況にも大きな変革をもたらした。中でも、非英語圏への対応を第一に指摘したい。

操作性の良さとともに忘れてならないのは、Windowsがハードウェアの壁を越える力を持っていることである。世界でパソコンといえばIBM系のMS-DOSパソコンとマッキントッシュである。日本国内で販売されているパソコンはMS-DOSを採用していてもIBM系ではない。国内のパソコンには、メーカーごとに規格があり、ソフトの互換性がない。しかし、Windowsを使用すると、このようなハードの制約がなくなる。Windows対応のソフトであれば、どのメーカーのパソコンでも利用することができる。この「Windows対応のソフト」は国内外を問わない。従来IBM系のMS-DOSパソコンの英語モードでしか利用できなかった海外ソフトが、国内メーカーのパソコン上で動くようになったのである。その際、ネックとなるのは日本語の使用であるが、Windowsがシステムとしても標準的な文字管理ルーチンに依存する限り、使用することができる。

LAN機能を強化したWindows NTではUnicodeと呼ばれる文字コードが採用されている。これは日本語を含め、世界の主だった文字を統一した2バイトコード体系で扱おうとするものである。実際的な問題として、Unicodeを採用しても、ただちに各国向けのアプリケーションを作成できる、というわけではない。それでも、非英語圏をもマーケットとしたソフト開発が、システムの基幹でなされていることは、十分注目に値する。

従来、世界的なソフトウェア開発は英語版を基幹として、各国版をローカライズすることで行われてきた。日本語版Windows 3.1が英語版より約1年遅れたゆえである。しかし、Chicagoというコードネームで呼ばれるWindows 4.0では、英語、日本語、ドイツ語の3言語を基幹として開発が進められているという（日本マイクロソフト・古川亨氏談。技術評論社：The Basic, 1994, 4月号）。

このような試みは本家のマイクロソフトに限らない。英語版WindowsにWin/Vとよばれる複数のモジュールを追加することで、日本語アプリケーションの利用が可能になる。Win/Vの開発は全くのサードパーティによるものであり、しかもこのモジュールは1万円を切った価格で提供されている。英語版と日本語版の2つのシステム間のタイムラグは確実に縮小しつつある。

Windowsは壁そのものにも変革をもたらしている。

高解像グラフィック表示を必要とするWindowsでは、従来の国内パソコンの640×400のドットマトリックスでは十分な表示が行えない。この解像度を越えるものとして、IBM系MS-DOSパソコンの解像度規格である、VGA、S-VGA、XGAとよばれる解像度を国内パソコンが採用し始めた。フロッピーディスクドライブも、従来の1.2MBと720KBの2モードに加えて、海外の3.5インチ2HD規格である1.4MBをも読みとることのできる3モード機能を持つものが増えてきた。

IBM系MS-DOSパソコンにハード上の変更を加えることなく、日本語の表示を可能にしたDOS/Vパソコンは、そのすぐれたコストパフォーマンス故に着実にシェアを伸ばしている。国内最大大手のメーカーを含め、国内メーカーのすべてが実際にDOS/V機を販売したり、販売する計画を持っている。

国内すべてのパソコンがIBM系MS-DOSパソコンへと移行する下地は整いつつあり、その日の近いことを予見する人は多い。

Windowsの影響力はMS-DOSパソコンの範囲にとどまらない。

マイクロソフト社の会長、ビル・ゲイツ氏はすでに「すべてのパソコンでWindowsを動かす」ことを公言している。インテル系のCPUに依存しない環境でWindowsを走らせようというのである。IBM、モトローラ、アップルの3社が共同で開発した新CPU、パワーPCは、マッキントッシュのシステム7をはじめ、MS-DOS、OS/2、ソラリス・ワークステーションOSなど複数のOSが走ることを最大の特長としているが、この中にWindowsが含まれていることは言うまでもない。

ハードをMS-DOS系とマッキントッシュに2分して優劣を競い合った時代は終わりつつあるのだろう。Windowsによってハードの壁そのものが取り壊されはじめたのである。

Windowsにより今後もたらされるものが、豊かなソフトウェアの時代であることを願って止まない。

醍醐寺の文化財とそのデータベース

日本女子大学 永村 眞

I 京都山科の醍醐寺は、真言宗醍醐派の総本山として、9世紀の創建より今日に至るまで、真言密教の布弘に大きな役割を果たしてきた。現在も上・下醍醐にわたる広大な寺域に古代以来の堂宇を擁し、多くの文化財を伝えて、日本史・仏教史・建築史・美術史などの分野に豊富な研究素材を提供している。

とりわけ文献史料は800函余の文書函に約10万点が現存しており、その調査は大正2年より今日に至るまで継続的に実施されている。調査過程で作成された目録はすでに百冊を越えるが、史料目録の完成にはなお今後20年程を要すると思われる。このように膨大な史料群であるだけに、それらが有効に活用されているとは言い難い。そこで現存史料の保存・管理と有効利用を図るため、醍醐寺史料のデータベース化が企てられた。具体的には、昭和62年より、筆者が在職した東京大学史料編纂所において、醍醐寺文書（100函分）の重要文化財指定目録の作成を目的に掲げて構築作業が開始され、平成元年には当初の目標を達成している。しかし平成2年から醍醐寺史料の全体を対象を広げ、日本女子大学において構築作業が継続してきたが、さらに平成5年からは文献史料のみならず、彫刻・絵画・建造物など文化財全般にわたるデータベース化を進めることになった。足掛け8年にわたり、漢字文字列からなる膨大な史料目録データの処理をめぐり、様々な問題解決の試みを続けてきたわけである。

II データベース構築の処理機器は、当初の汎用コンピュータ（ACOS）からデータベース専用ミニコン（TAU-T m e l y）を経てワークステーション（SUN）に落ち着いた。また処理システムも、当初はRDBMSのもとで開発された固定長データ処理システムであったが、これも大きく変容をとげた。特に不定形な文字列に対応するための可変長データ処理機

能、史料がもつ複数の時代情報に対応するためのマルチバリュー（1フィールドを擬似的に複数フィールドに細分する）機能、特定漢字の複数字体を定義する漢字字種テーブルの参照機能、目録データ形式の欠点を補うための画像データの表示機能、さらに蓄積データから登録語句の索引を編成する機能等があいついで実現した。

漢字文字列の処理をめぐる試行錯誤のなかで、直面した問題点への解決が現在の処理システムへと導いた。ユーザの立場から安易に手の付けられぬ漢字字種・コードの問題を除いて、一応の解決がつけられたと言える。そして文献史料の漢字文字列処理を基礎に、絵画・彫刻・建造物の文字列・画像の統合処理が実現することになった。

III 現在、約4万件の文献史料の文字列データの他は、史料・彫刻の画像データが試験的に入力されているにすぎない。今後、画像データの蓄積が進むにつれて、画像をめぐる問題点、例えばCRT表示やハードコピーの質などについて解決が要請されることになる。

しかしこのような技術的な問題点とは別に、文化系分野におけるデータベースに共通した問題点として、構築に要する労力・経費に比してデータベースの利用者が著しく少ないということがあげられる。醍醐寺文化財のデータベースは、その保存・管理や研究にとって有用な道具となることは確かであるが、その利用者は決して千・万単位ではありえない。しかし如何に利用者が少なくとも、文化系諸分野における揮発性の少ないデータベースは、蓄積し続けるところに意義がある。そしてこのディレンマを克服する一つの術は、専ら検索に用いられた蓄積データ自体を、二次的に活用するということではなかろうか。

情報化社会における一つの試み—駿河台大学文化情報学部のコネプト—

安 澤 秀 一

1-1 情報機器における技術革新は日本のような漢字使用国にも大きな情報革命をもたらしています。とはいえ現時点でくらべれば、パーソナルコンピュータの普及率がアルファベット使用国に対比して格段に低いことは否めません。ただ近年の情報機器の価格低下がネットワークの拡大を伴いながら、今後の普及率を促進するであろうことは確実でありましょう。

1-2 大学教育における情報関連機器の生産工学やプログラミング言語の教育は早くから行われていますし、大きな成果をあげていることも周知のことです。文系や社会科学系においても多くの先覚者たちが研究の手段として情報機器を駆使した研究成果をあげていることもまたよく知られていることであります。

1-3 これまで情報関連高等教育における文系・社会科学系の学部としては、経営情報学部が主流を占めていました。最近の傾向としてようやく社会情報学部というネーミングが増え始めたところです。これは東京大学新聞研究所が社会情報研究所に改組・改名した余波でしょうか。家政学部からの転身もあると聞きます。

1-4 学部名称は当然、その学部における教育目標を端的に示そうという意図をもつでしょう。駿河台大学は1994年度（平成6年度）から文化情報学部を開設しました。設置にかかわった一員としてその意図を説明せよ、というのがニューズレター編集担当のお考えであろうと、駄筆を弄することとなりました。

2-1 駿河台大学文化情報学部における人材育成の基本コンセプトとして「情報メディアエイト」の育成を謳っております。情報メディアエイトというのは聞き慣れない言葉かと思いますが、英和辞書では仲介者という訳語が当てられています。まさに情報を仲介する役割を担う人材を想定しているのであります。

2-2 情報を仲介するというのはどういうことなのか、と疑問を抱かれるかと思いますが。専門家や学者・研究者は自分の研究に必要な情報データを研究素材や研究対象から抽出すること

を日常的な仕事としております。そして学問の分野毎に情報流通の範囲は自ずと限られています。何故、仲介者が必要なのか、自分で出来て当然だと考えるでしょう。

2-3 ところで世間ではいわゆる情報誌が氾濫しております。思い返すと映画館華やかな頃、映画館の上映演目や上映時間を列記した「ピア」という雑誌が創刊されました。いまはこの種の雑誌の大手となっており、様々な分野の専門情報誌が競っています。こうした情報提供メディアとは情報メディアエイトの活字版であろうと考えます。今後は電子メディアが増加するものと思われます。

2-4 情報を必要としている普通の人々の数の方が圧倒的に多いし、また必要とする情報も多種多様であり、情報の質もまた千差万別なレベルで要求されているのです。普通の人々がヘーゲル著作のデータベースにアクセスしたいという欲求に駆られているとはいえにせよ、一般に必要な情報需要は増加するといえそうです。そこで情報資源へのアクセスのための仲介機能を果たす人材が必要となるという考え方であります。

3-1 ところで一口に情報といっておりますが、私は情報を三つの段階もしくは局面に分けて捉えたいと考えております。第一は宇宙の森羅万象全てが人間にとっての情報源泉（資源）であり、第2は情報源泉（資源）から人間が取り出した情報データであり、第3は複数の情報データを一定の方法で秩序付けした結果としての知識化された情報データ群（知識化情報）です。情報データと知識化情報は情報源泉（資源）に繰り込まれます。

3-2 このため情報源泉は不断に拡大するとともに、情報データおよび知識化情報という区別が曖昧に受けとめられてしまうということにならざるを得ないと思います。しかし情報源泉、情報データ、知識化情報という三つの区分とは、情報の使い手である利用者のその時々利用の仕方に応じた区分であるとするれば、情報を

人間的な次元に置いて考えることが可能だと考えます。

3-3 なぜ情報データ、知識化情報が情報源泉に繰り込まれるのでしょうか。情報データ、知識化情報とは人間が獲得したいと思い、人間相互に伝え合うために情報源泉から引き出したものです。伝え合うために、人間はまず身体表現や音声言語を使用し、ついで5、6千年前から世界の各地でそれぞれの言語体系に対応した文字を使い始めましたが、手書きが主流でした。手書きにはそれなりの限界があります。

3-4 5百年前に活字使用の印刷が始まり、百年前に感光材による映像固定化や可塑材による音響固定化、50年前に磁性媒体による電気信号の固定化という技術革新が進行しました。こうした技術革新は情報伝達のみならず、記録媒体の多元化と情報蓄積つまり情報源泉への情報データや知識化情報の繰り込みを可能にしました。人工の情報資源が加わることで、情報源泉は無限大化することが可能になりました。

4-1 情報化社会とは電気信号に置き換えられた情報伝達の早さを競うだけではなく、上記のように人間の行為によって創り出された情報データや知識化情報が、情報資源として情報源泉に付加され、蓄積され、利用されることに大きな意味を持たせなければならないということでありましょう。文字の発明が、印刷書物の大量刊行が、録音や映画が、それぞれの時代に大きな変革をもたらしたのと同じでありましょう。

4-2 今日の社会はこれまでの歴史的積み重ねの上に、一方に無限大に増え続けるであろう情報資源の供給と、他方に様々なレベルでの多種多様に輻輳した情報の一般的需要があるといえます。情報資源へのアクセスが普通の人々にとっても適切かつ迅速に可能ならしめる手段や方法、またプロセスについて、既存の制度的枠組みを再編成して、情報化社会に適應するようにするということが必要なのではないでしょうか。

4-3 情報蓄積機能を果たしてきた既存の社会的施設を代表するものとして、図書館、博物館、文書館を挙げてよいでしょう。もっとも文

書館（アーカイヴズ）については、日本ではほとんど意識されることがないように思われます。特に第2次世界大戦後における植民地独立後における国家建設のなかでのアーカイヴズが国民の存在証明そのものであるという考え方を始め、文書館の新しい運営の仕方は全く無視されています。

4-4 また情報化社会の進展を無機的な機械の支配する世界などと、きめつける必要はありません。人間としての営みは個々人の感性から始まるものであります。感性は情報資源の内の自然景観や歴史景観、また人工景観といった風景への接触から育ちます。人間の原風景体験こそ情報受容という経験の出発点であります。文字の世界、音の世界、映像の世界からイメージを触発される時、感性が重要であろうと考えます。

5-1 駿河台大学に情報学部設置への構想を開かれた時、上記のようなイメージを実現できるような科目構成を考えました。また丁度、大学設置基準の大綱化が発表されたということもありました。そこで一般教育と専門教育の壁を外すこと、情報化社会に適應できるような読み書き話すの能力について文字の世界とコンピューターの世界とを共存させること、日本語の世界と外国語の世界とを共存させること、の三つを柱にすることとしました。また情報源泉の全てを扱う訳に参りませんから、四つのテーマを選びました。

5-2 一つは景観と旅行という感性を育てる事柄に関係する情報資源管理のコースです。二は音響映像に関係する情報資源管理のコースです。三は活字印刷刊行物に関する情報資源管理のコースです。四は組織体業務遂行のために作成される記録という情報資源管理のコースです。記録管理というプロセスには保存という事柄が必然的にかかわります。つまりアーカイヴズ管理を含むことになります。1と2をあわせて文化情報学科としました。3と4をあわせて知識情報学科としました。学部名称は人間の文化行為にかかわる情報資源を対象としていることを示すために、文化情報学部にしたということでもあります。

I. はじめに

情報知識学会の会員にとって、「情報」という概念を如何に定義づけるかは、大きな、そして基本的な関心事である。また、「情報」のみならず、「情報」と類縁性の深い、「知識」や「資料」という概念との関係も問題となる。

この際、日本語の「情報」という語を、それに相当する外国語としての英語との関連の下で調べてみることも一つの手掛かりを得る方法であろう。そこで、英語のInformationとIntelligenceという語の相互の関係を、著者の所属する図書館・情報学の視点からとらえ、会員諸氏のご参考に供したい。

尚、本稿は著者がかつて図書館・情報学系の雑誌に掲載した小論の一部を転載するものである。

1)

II. InformationとIntelligenceの意味

我々にとって身近な"information"という語も多様な内容をもつ。一方、"intelligence"という語は人によって、さまざまな意味内容を込めて用いられている。

そこで図書館・情報学においてこのinformationとintelligenceという語をどのように位置づけるか、相互関係はどうなっているか、またそれがどのように意味づけられているか等について検討する。

A. 図書館・情報学におけるInformationの意味

先に図書館・情報学の研究対象は情報であるとしたが、図書館・情報学の社会的な投影としての図書館や情報センター等の機能とは単に情報の提供だけであろうか。

Butlerによれば、図書館で図書を利用する読者の動機は3つに分けられるという。即ち、インフォメーションを求めるため、美的鑑賞のため、楽しみのためである²⁾、とする。このinformationについて、Sheraは、"情報(information)とは……'事実'であることを言うをまちません。それは実のところ刺激なのです。感覚を通して認識する刺激であります。この情報なるもの、1個であるかもしれません。"³⁾と述べている。またVickeryは、"情報 (information) とは2つの形態、即ち文献もしくは個人の中に存する知識のか

たまりとしてあらわされる、"⁴⁾と述べている。

これらは、一般に図書館・情報学に関係する人々のinformationに対する最大公約数的な見方であろう。一方、このような図書館・情報学分野を代表する意見に対して、他分野の人々の意見の代表として、次の2人の説を紹介する。

Machulpは、より端的に"全ての情報 (information) とは知識である。"⁵⁾と断定し、Bouldingは"……メッセージは情報 (information) である。メッセージはイメージをつくり出すための変化を意味している。"⁶⁾として

こうしてみると、MachulpやBouldingに代表される図書館・情報学以外の分野でのinformationの意味、即ち、"全て情報は知識"とか"イメージをつくるためのメッセージが情報"とか、に対して、図書館・情報学分野のそれは、より限定的な意味合いをもっていることが明らかになるだろう。

一方、図書館・情報学という"情報"とその関連諸問題を研究対象とする科学分野のうち、特に"情報"を対象とする情報学 (information science) について、SheraとClevelandは次のように述べる。"(情報学は) 情報の属性や動き、情報の流れを支配する力、および最適な情報の入手、利用を可能とするように情報を処理する手段を研究する科学である。情報の処理は情報の生産、提供、収集、組織化、蓄積、検索、解釈、利用を含む。情報学の分野は数学、論理学、言語学、心理学、電算機技術、オペレーションズ・リサーチ、グラフィック技術、コミュニケーション論、図書館学、経営学及びその他の諸分野から派生したものである。"としてその学際性を認めるとともに、"情報学 (information science) という語は1959年に記録された知識とその最も広い意味でのその知識の伝播として、はじめて用いられたのが、その後、多様な意味が込められ、厳密な意味での同意は得られていない。"⁷⁾と述べている。このことは図書館・情報学の内容がまだ完全に固まっていない、発展途上にあることを意味する。

しかし、同じくSheraとClevelandによれば、現在の情報学の一推進母胎となったAmerican Soci-

ety for Information Science が、その名称をAmerican Documentation Institutionから変更したという事実が示唆する如く、その主たる機能が、documentary reproductionからdocumentationへ、そしてinformation scienceへと発展してきた歴史的な展開の事実があり、これを我々としては見逃すわけにはゆかない。

更にButlerの説によれば、図書館のinformationの提供という機能は3つの機能のうちの1つにしかすぎない。そうするとinformationの提供を主とする図書館・情報センターとは、ここで自ずから、今日、日本で言う専門図書館（いわゆる研究図書館、主題専門図書館、企業図書館等を含む）に限定されてくる。

したがって一般図書館・情報学はともかく、情報という問題により密接な専門図書館においては、情報の提供、それも一般的な意味ではなく、かなり限定的な、特定の目的に特化した意味での"情報"の提供が期待されていると結論づけることができる。

そしてこのような特定の利用目的に特化した"情報"をintelligenceと読んで、一般のinformationと区別するのではないだろうか。

B. InformationとIntelligence

以上の結果から本校での対象となる専門図書館活動、換言すれば、いわゆるDocumentation活動や、Information Scienceにおいて、informationとintelligenceはどのように扱われているのだろうか。

そこで以下では若干の定義例と辞書的意味、更にはシソーラス上での関係を例示しつつ、本稿における用法を明らかにしたい。

Wilenskyによれば、"IntelligenceとはPolicyに関するInformationであって、科学的な知識および、学術的であるか否かを問わず、政策的もしくは観念的なInformationを含む。"¹⁰⁾という。また多田和夫によれば、"われわれ日本人の間では情報という言葉は2通りの意味に使っている。まず'事実あるいはデータ'を指す言葉として使用されることがある。これは英語のInformationに相当する。また、'事実あるいはデータに知的な処理を施した結果得られる知識'を指す言葉として使用されることがある。これは英語のIntelligenceに相当する。"¹¹⁾と述べている。

このようにInformationとIntelligenceは似かよった意味を持つ語である。言うまでもなく情報を管

理することの目的は利用者への情報の提供であるが、この提供される情報とはInformationの提供なのかIntelligenceの提供であるのかという問題がある。そこで辞書的な意味を調べると次のようになる。¹⁰⁾

Information:

- ①伝達されたり、特定の事実や環境についての知識
- ②コミュニケーション、調査、教育を通じて得られる知識
- ③知らせること及び知らせる行為
- ④公衆に情報を提供する人及び部署
- ⑤〔法律用語〕――略――
- ⑥〔コミュニケーション用語〕――略――
- ⑦〔コンピュータ用語〕コンピュータで処理されるためにコード化されたデータ

同義語; data, facts, intelligence, advice

Intelligence:

- ①推論や理解の能力
- ②上記能力の発露
- ③理解力
- ④出来事、環境についての知識
- ⑤情報の収集や配布
- ⑥a)現在もしくは潜在的な敵についての情報、b)そのような情報から引き出される評価された結論、c)この種の情報を集めるための組織、機関
- ⑦知的存在、霊
- ⑧情報の交換

以上の辞書的な意味を通じて、informationの中のある特定な状態のものがIntelligenceであることがわかる。

一方、シソーラス上に見られるInformationとIntelligenceの関係は次のとおりである。

まずE. J. C.シソーラスの場合、¹¹⁾

Information Systems Intelligence

RT--Intelligence Informationの収集、評価、分析、総合及び解釈から得られる知識

RT--Information Systems

UNESCOのSPINESシソーラスの場合、¹²⁾

Information Intelligence(Information)
Used for Information

uf Intelligence

(Information)

以上からInformationとIntelligenceの間には密接な関連があり、Informationがある一定の処理をされるとIntelligenceに転化するということがわかる。

この関係を情報（Intelligence）の実務担当者は次のように述べている。

この普通言われる「情報」が実は、情報を取り出す原材料にすぎないことを知っておくべきだ。英語で言うInformationはこの原材料である。このインフォメーションから得られる情報がIntelligenceである。インテリジェンスと言うとスパイを使うこと、またはこれにより入手する情報のように考えている人が多いがそれは間違いである。これを諜報と訳すのもこのような間違いに基づいた誤りである。

以下、インフォメーション（原材料）を「情報資料」、インテリジェンス（精製された本物の情報）を「情報」と呼ぶことにする。¹³⁾

更にIntelligenceという概念については、次のような定義例が、米国において存在することをRansomが紹介している。¹⁴⁾

①米国Hoover Commissionの1955年における定義：

Intelligenceは一連の行為を始めるに先立って知っておくべき全てのものごとを取扱う。

②William F. Rabornの定義：

Intelligenceとは、その確度、意義、重要性について慎重に評価されたInformationを指す。intelligenceとinformationの差異は正確さを評価し、国家安全保障の観点から、その意義、重要性を計量するか否かにある。

③Dictionary of United States Military Terms for Joint Usage:

Intelligenceとは収集、評価、分析、総合及び全ての利用しうるInformationから作られた生産物。Informationとは外国あるいは作戦地域の1つまたは、それ以上の側面に関するもので、直ちにもしくは潜在的に政策企画上重要な情報資料を言う。

以上の定義例は、国家安全保障とか、軍事の側面からのIntelligenceの定義であるが、情報の実務

については、人類の歴史において、図書館や学術の世界よりも、政治や軍事の分野の方が歴史も古く、先行している以上、やむをえない。そしてRansom自身は次のようにIntelligenceを考えている。¹⁵⁾

"Intelligenceの追求とは、決定を下し、行動を起こすためには必要とされるInformationの追求である。（分析・評価等の情報処理の）生産物として得られたInformationは本質的にIntelligenceである。このIntelligenceという1つの語が時にはそのプロセスに、また時にはそのプロダクトとして用いられることもある。"

この最後のIntelligenceがプロセスをも、プロダクトをも指すという指摘は、明らかに後にその名前を再度紹介するSherman KentのIntelligenceについての考え方、¹⁶⁾"Intelligenceは知識であり、組織であり、行動である。"に即したものであろう。そしてこのKentの考え方は、"情報"について知識としての理論体系を意味し、行動としてその実務での実践を意味し、組織として理論と実務を結合させる管理を意味すると考えるならば、情報学そのもののあり方、パラダイムを端的に要約したものとして興味深い。

しかし、情報学のパラダイムを論ずることは本稿の目的ではない。そこで以上のIntelligenceについての考え方、定義を集約したものとして、Washington Plattの定義¹⁷⁾を挙げておく。

"intelligenceとは、選択され、評価され、解釈されたinformationから引き出された

意味のあるステートメントである。この定義は素材としてのinformationと精製された

intelligenceとの区分に由来する。この区分こそが、情報業務という世界にいる人々

にその職業上のプライドを持たせることになる。"

本稿においても、以下ではInformationとIntelligenceについて、この区分に準拠したいと考える。

また以上より図書館・情報学の研究領域にこのIntelligence論が含まれることの必然性はもとより、Intelligence活動を積極的に推進することにより、図書館や情報業務の現場にあって、情報の利用者と並列しうる独自の業務分野や情報業務それ自体の中に真の知的創造活動を見出しうる基盤が与えられることが明白になるであろう。

Ⅲ おわりに

以上のことから明らかになるように、Informationのレベルでの「情報」を問題にすると、「情報」そのものより、記録媒体の取り扱いが問題となり、図書館学（図書館・情報学）や記録管理学等との関係が深まるであろう。Intelligenceのレベルでの「情報」を問題にすると、情報そのものの内容により深く関係することになり、各「主題」（Subject）に精通していることが求められる。

一方、Intelligenceという語は、最近ではArtificial Intelligence（人工知能）として用いられる場合が多いが、この人工知能論も単なる情報処理技術論としての人工知能論から組織知能論へと、そのIntelligenceの保有主体や利用目的にまで対象を広げて研究され始めている。¹⁰⁾

このようにInformationとIntelligenceという語をとり上げるだけでも、その研究関連領域は広く拡がってゆく。

我々の情報知識学会は、このような広範な研究対象をもった、豊かな研究領域であることを再度想起し、それだけに、「情報」と関わりを持つ、多くの（殆ど全ての）研究領域の人々が集い、交流することが必要不可欠であることを蛇足として付加する。

注・引用文献

- 1) 高山正也. "図書館・情報学"におけるIntelligence概念の展開. Library and Information Science, no. 17, 1979. p. 133--152.
- 2) Butler, Pierce. 図書館学序説, 藤野幸雄訳. 東京, 日本図書館協会, 1978. p. 80--8.
- 3) Shera, J. H. 図書館の社会学的基盤, 藤野幸雄訳. 東京, 日本図書館協会, 1978. p. 88.
- 4) Vickery, B. C. On retrieval system theory. London, Butterworths, 1965. p. 1--2.
- 5) Machlup, F. 知識産業, 高橋達男, 米田宏監訳. 東京, 産業能率短期大学, 1969. p. 18--9.
- 6) Boukling, K. E. ザ・イメージ, 大川信明訳. 東京, 誠信書房, 1962. p. 6.
- 7) Shera, J. H. and Cleveland, D. B. "History and foundations of information sciences," Annual review of information science and technology, vol. 12. 1977. p. 266.
- 8) Wilensky, H. L. "The failure of intelligence: Knowledge and policy in government and industry," Proceedings of the 19th annual winter meeting (1967), in <Communication in organization> ed. by Porter, Lyman and Robert, Karlene II. 1977. p. 118.
- 9) 多田和夫編. 企業と情報. 東京, 培風館, 1963. p. 3. <経営科学シリーズ3.>
- 10) The Random House dictionary of the English language. New York, Random House. 1971. 2059p.
- 11) Thesaurus of engineering and scientific terms. 1st. ed. Engineers Joint Council, New York. 1967. 690p.
- 12) SPINES thesaurus. Paris, Unesco Press. 1976. 3 vols.
- 13) 加藤龍樹. 国際情報戦: 情報判断はこうしてつくられる. 東京, ダイヤモンド社. 1978. p. 8--9.
- 14) Ransom, H. H. The intelligence establishment. Cambridge, Harvard University Press. 1970. p. 7--8.
- 15) Ibid., p. 8.
- 16) Kent, Sherman. Strategic intelligence for American world policy. Princeton, Princeton University Press. 1949. 226p.
- 17) Platt, Washington. Strategic intelligence production. London, Thames and Hudson, 1957. p. 8.
- 18) 例えば, オペレーションズ・リサーチ (ISSN 0030-3674) . Vol. 33, No. 3(1988. 3)は「組織知能」の特集号となっている。

----- 編集部より -----

次号よりニューズレターの原稿の締切日を変更いたします。従来は発行日の前月（奇数月）の20日となっておりますが、複数の編集委員が作業に加わることから、発行日の遅れが目だつようになって参りました。偶数月の1日の発行を保持するためにも御協力をお願いいたします。

新しい締切日は発行日の前月15日です。

なお原稿はフロッピーでお送りください。編集委員の方々はすべてボランティアでお願いしており、入力作業までは手が回りません。こちらの方もどうぞよろしくお願いいたします。編集に対するご意見。ご要望をお寄せください。

国際情報ドキュメンテーション連盟国際会議特別部会「記録史料管理」

Federation Internationale D'Information et De Documentation,
Special Interest Groupes, Archives and Records Management
(FID/SIG/ARM)

第47回国際情報ドキュメンテーション連盟総会国際会議 The 47th General Assembly of the International Federation for Information and Documentation が、大宮ソニックシティを会場として1994年10月3日から9日にかけて開催されます。本国際会議は自然科学・社会科学・人文学など全ての学問分野でのドキュメンテーション、情報学、情報管理などの研究開発を促進させるために隔年に開催されてきました。今回はFID創立百周年を記念して日本で開催されることになりました。情報資源としてのデータベースの研究開発促進を目指す世界の趨勢のなかで21世紀を展望する「新しい価値観と情報利用」という共通課題が追求され、世界中から参集します。

日本での受け入れ主体は日本学術会議、情報処理学会、情報科学技術協会、情報知識学会であります。そして一般会議の他に特別部会がいくつか開催されます。その一つに「記録史料管理 Archives and Records Management」の開催が予定されております。日本でも漸く最近その重要性が認められるようになった情報センタや、記録センタ、またアーカイヴズについて、国際的な関心がきわめて高いことと、情報資源の蓄積保管施設として認知されていることを、周知させる好機会があります。

なおこのFID特別部会「記録史料管理」は、情報知識学会人文・社会科学系部会が研究活動の一環として、すでに開催して参りました「歴史研究と電算機利用」研究集会の目的と合致する部分が多いので、第四回研究集会をかねて実行いたします。

つぎにFIDからの特別部会「記録史料管理」の会合開催案内状を紹介いたします。

FID書記局長およびSIG・ARM責任者からの趣意書（仮訳—安澤秀一—）

<FID書記局長>

特別部会「記録史料管理」の設置について

別添趣意書はFIDアメリカ合衆国国内委員会書記ミズ、カサリーン、ラノンが執筆したものです。この特別部会は情報資源管理という枠組みに「記録史料」問題を国際的論議に合流させる場として設置されるものです。なおこの新部会はICAなどで行われてきた議論と重複しないようにします。

<FIDアメリカ合衆国国内委員会書記ミズ、カサリーン、ラノン>

「FID・SIG・ARMの設置についての趣意書」

1 趣旨

記録史料管理は情報管理の基礎となる部分の一つであります。記録はどのような面から見ても日常業務の一部分です。史料は歴史的価値と歴史的遺産とを構築するのは何かということについて、（発生源）組織体の考え方を表し、歴史的文脈の中に出来事と人とを位置付けることを支え、政策や法律、また合意についての研究と書誌事項を提供する。情報のライフサイクル（理論）を適用するならば、記録管理は効果的に記録を管理し、不要記録を選び出し、重要書類の公開を容易し、競争を支えるように、組織体を整備できる。管理行動の重要性を認知することを含めて、記録の作

成、管理、移し換えを促進させるのに役立つ多くの議論がある。情報の地球規模交流、様々な局面での自動化、機密情報の安全性、公開とプライバシーの問題、環境と気候、外部情報（獲得）行動との連携、専門性の認知、所有権問題、および古い記録や現代記録の保存、にかかわる多数の論文が存在している。史料管理はしばしば研究志向もしくは理論志向でありすぎて、非実用的であったりする。記録管理は管理業務における雑務と思われる。アーカイストやレコード・マネージャーは自動化や国際記録管理協会の企画と実行との連携の重要性をしらせることに遅れをとっている。記録管理に対する一般的注目と情報管理戦略という枠組みの中での基本構想を強調することなしには、情報システム計画とシステムデザインは同じ誤りを、つまり重複性と資源の無駄遣い、および歴史的に確かつ完璧な史料蓄積を生み出す組織体の能力を抑制することになるであろう。こうした議論の底流には、組織体や政府が記録史料管理の重要性を認識し、情報管理計画の中での重要性の位置付けを向上させ、そして日々の管理計画と合流させることが必要なのだということがあるのである。

現在、関連所団体、例えばアメリカ・アーカイスト協会、レコード・マネージャー協会、また国際文書館評議会などは、望ましい専門的支援とサービスの基準を用意し、専門部会や実行委員会を通じて、記録史料管理にかかわるたいへん重要な文献を発表している。また諸団体は情報資源管理の重要性についての研修や情報を提供している。とはいえ記録管理と史料管理の一体化を強調することもないし、また全ての情報資源にかかわる戦略の構成部分としての結合方法についてもあまり議論されていない。こうした事柄についての議論こそがいま必要なのである。F I Dは情報管理を強調し、国際的な視野を提供し、そして特別部会は情報、行政、政策の研究を高度化することに役割を見いだした。加えてF I Dは発展途上国と連携し、会合を開催して発展途上国を支援し、専門家、交流、研修に役立ちたい。記録史料にかかわる新しい特別部会が重要であることを示すことこそ、F I Dが情報管理という全体の中で、記録史料管理に位置付けを与える第一歩なのである。

2 展望

F I D / A R M (F I D特別部会記録史料管理)は、記録史料管理の全ての分野、特に情報管理政策と技術的実行にかかわる分野に対応する。様々な媒体形態での記録史料とは、紙、電子、音響映像といったものを含むものである。

3 任務

F I D / A R MはF I D会員にたいして、次のようなサービスを提供する。

基本文献を紹介し、動向を見守る。

記録史料管理にかかわる組織体と政府による行動と解決を見守る。

F I D会員および関連所団体へ情報普及を行う。

情報・経験・知識の交流のための会合を提供する。

他のF I D / S I Gおよび諸団体と情報の交換を行う。

上記の諸々についてF I D本部および個々の会員が行動するための勧奨の提起もしくは支持。

サービスと教育についての相談を行う。

〒103 東京都中央区日本橋2-14-8 加商ビル

(株)アイシーエス企画 第47回F I D国際会議

Tel 03-3272-7981

Fax 03-3273-2445

英語コーパス研究会活動報告

英語コーパス研究会事務局 今井光規

英語コーパス研究会 (Japan Association for English Corpus Studies) は、コンピュータ利用の英語英文学研究の促進を目的として、1993 年 4 月 1 日に創設されました。会長は、齊藤俊雄大阪大学教授で、事務局は現在、560 豊中市待兼山町1-8 大阪大学言語文化部 今井研究室 (電話: 06-844-1151 内線 5567 (齊藤俊雄) / 5711 (今井)) に置かれています。平成 6 年 3 月現在、会員は約 100 名です。以下、本研究会の活動のうち主要なもの二つ (例会と機関誌の発行) について簡単に報告します。

1. 例会

毎年 2 回、春 (4 月) と秋に例会を開催しています。昨年春の第 1 回例会から本年 4 月 2 日開催予定の第 3 回例会までのプログラムから、主なものを拾ってみます。

(研究発表)

「コーパスに見られる分詞構文」

(京都外国語大学 赤野一郎・藤本和子)

「ヘルシンキコーパス—紹介と検索例」

(神戸大学 西村秀夫)

「言語情報処理の教育について—追手門学院大学の事例」 (追手門学院大学 丸谷満男)

「マーガレット・ドラブル小説の文体研究」

(神戸商科大学 瀬良晴子)

「テキスト・データベース管理システム SIGMA

(PC版) を用いた語法研究」

(九州工業大学 許斐慧二)

「タグ付きコーパスの分析について—多変量解析法を用いて」

(豊田高専 高橋 薫・中京大学 古橋 聡)

(シンポジウム)

「コーパス言語学—理論と実際」 (司会 京都外国語大学 赤野一郎) 〈「コーパス言語学研究の可能性」 (相山女学園大学 深谷輝彦)、「コーパス構築の実際—KUFSC コーパスの場合」 (慶応大学 吉村由佳)、「コーパスにみる名詞化の使用状況—-ing 構文と派生名詞」 (大阪大学院生 梅咲敦子)〉

(婦朝報告)

「オーストラリア・ニューカースルにおける Literary Computing の状況」 (有明高専 田畑智司)

「Bank of English について」

(島根大学 井上永幸)

(講演)

「ヨーロッパにおける英語コーパス研究の動向」

(徳島大学 中村純作)

「AWK によるコーパス処理について」

(東京大学 山縣宏光)

例会では、各発表ごとに極めて活発な質疑応答が行われ、大変貴重な情報交換の場となっています。

2. 機関誌の発行

英語コーパス研究会の機関誌「英語コーパス研究」(*English Corpus Studies*) [ISSN 1340-301X] は、毎年度末 3 月に発行されます。経費節減のためすべて事務局で編集を行っています。論文、コーパス・ソフト類の紹介、研究ノート、例会記録、会員名簿などを掲載します。第 1 号は本年 3 月 25 日の発行で、115 ページです。目次から主なものを拾ってみます。

「Helsinki Corpus に見る強意副詞」 (西村秀夫)

「コーパスに見られる分詞構文」

(赤野一郎・藤本和子)

「検索処理における頻度についての問題」

(高橋 薫・古橋 聡)

「ヨーロッパにおける英語コーパス研究の動向」

(中村純作)

「言語情報処理教育—追手門学院大学の事例」

(丸谷満男・樋口 靖・稲木昭子・高尾典史・安藤幸江・藤本雅樹)

"A Corpus-Based Study of Transitive Verb Nominalizations: Nominal -ing Clauses and Derivative Noun Phrases" (Atsuko Furuta Umesaki)

「The Century of Prose Corpus と文体研究」

(齊藤俊雄)

入会のご案内

英語コーパス研究会に入会ご希望の方は、氏名、郵便番号・住所、電話番号、所属をご明記のうえ、郵便振替で下記の口座へ年会費をお送り下さい。年会費は 4,000 円 (学生 3,000 円) です。郵便振替以外の方法による送金をご遠慮下さい。

(本年 5 月 1 日から) 00940-5-250586

英語コーパス研究会

(4 月 30 日までは) 大阪 4-250586

英語コーパス研究会

平成6年情報知識学会総会・研究発表会 プログラム

日 時：1994年5月28日(土)10:00-18:00

会 場：凸版印刷本社1階ホール

研究発表会： テーマ： 情報知識への接近

10:00-12:00

A会場：用語からの接近

A1：複合専門用語の結合パターン記述における
概念の階層レベルの役割について

影浦峯（学術情報センター）

A2：専門用語における階層関係および関連関係
の抽出法

頼静娟，王晓晶，藤原譲（筑波大学）

A3：日本医学専門用語の構造解析

小山照夫（学術情報センター）

B会場：専門分野からの接近

B1：酵母の分類と同定

菅原秀明，宮崎智（理化学研究所）

B2：分散型材料データベース・システム

藤田充苗（金属材料技術研究所）

B3：非線形光学材料を対象とした自己組織型
情報ベース

宇陀則彦，藤原譲（筑波大学）

12:00-13:00 昼食およびデモの見学

13:00-14:20

A会場：用語と文字からの接近

A4：源氏物語大成の用語索引作成について

上田英代，上田裕一，樺島忠夫，

今西裕一郎，村上征勝（統計数理研究所）

A5：法帖の情報解析

山本毅雄，朱平，和泉新（図書館情報大学）

B会場：専門分野からの接近

B4：書誌情報の評価をめぐる

坂敏弘（日外アソシエーツ）

B5：歴史的資料の情報解析研究

八重樫純樹（歴史民俗博物館）

14:20-14:30 休 憩

14:30-15:30 特別講演： 仮想現実感技術とその応用

土井美和子（東芝）

総会

15:45-16:45 情報知識学会総会

懇親会

17:00-18:00 懇親会

論文募集

第47回FID国際会議

1994年10月2～9日

テーマ *Finding New Values and Uses of Information*

国際情報ドキュメンテーション連盟 (International Federation for Information and Documentation: FID) は自然科学、社会科学および人文科学など全ての分野でのドキュメンテーション、情報学、情報管理などの研究・開発をはかる国際機関で、隔年に国際会議を開いてきました。

この度FID創立100周年を記念し、本年10月に東京で開催されることになりました。ハードウェア技術の進歩に比べ、ソフトウェアとくにデータベースの研究開発が立ち遅れている世界の趨勢の中にあつて、21世紀を展望しながら標記のテーマを掲げての日本での国際会議に、全世界の科学者・研究者の大きな関心と期待が寄せられています。どうぞ奮って研究発表にご応募ください。

- 会議の名称：第47回国際情報ドキュメンテーション連盟総会国際会議
The 47th General Assembly of the International Federation for Information and Documentation
- 主催：日本学会議 情報処理学会 情報科学技術協会 情報知識学会
後援（予定）：文部省 通商産業省 科学技術庁 国立国会図書館
学術情報センター 日本科学技術情報センター
協賛（予定）：化学情報協会ほか18学協会
- 開催時期：1994年10月2日～10月9日（8日間）
- 開催場所：大宮ソニックシティ（大宮市桜木町1-7-5）
- 組織委員長 藤原鎮男（東大名誉教授） 運営委員長 藤原譲（筑波大教授）

◎論文募集

Subject

1. Fundamental Theory of Information
2. Information Science of Classification and Terminology
3. Development of New Media and Multi Media
4. Advanced Information Technology
5. Novel Paradigm of Information Systems
6. Business, Finance and Industrial Information
7. Information Transfer, Standard, Copy Right
8. Training and Education
9. Information Policy
10. National Resources

プログラム委員長 細野公男（慶大教授）

スケジュール

論文メ切 1994年4月中旬
著者への採否通知 4月下旬
最終原稿提出メ切 6月15日

論文の記載方法

- ・ A4またはレターサイズに英語でダブルスペースでタイプすること
- ・ 論文の長さは、演題等を含めて6～12ページとすること
- ・ 論文には演題、氏名、住所、電話番号を明記すること
- ・ オリジナル論文にコピー3部を添えること

論文の提出および問い合わせ先

〒103 東京都中央区日本橋2-14-8 加商ビル

(株)アイシーエス企画

第47回FID国際会議

Tel 03(3272)7981 Fax 03(3273)2445

◆第22回 人文科学とコンピュータ研究会

(発表件数 6件)

(主査：及川昭文, 幹事：八村広三郎, 長瀬真理, 竹内健)

日時 平成6年5月27日(金) 10:00~17:00

会場 諏訪市博物館

[諏訪市中洲171-2, JR:上諏訪下車, 諏訪バス(市内循環線, 1時間に1本):上社下車(約20分),
またはタクシー(約15分). Tel.(0266)52-7080]

議題

10:00~12:30

(1) 文学部におけるパソコン実習

金水 敏(神戸大)

[概要] 92年、93年に神戸大学文学部で実施した、MS-DOSを中心とする実習の概要と総括。

(2) パソコンLANと語学教育について

上村 隆一(福岡工大)

[概要] 従来のLLに対するLANベースのパソコン語学教育システムの優位性を実践的観点から論証する。

(3) デモンストレーションと見学：諏訪市博物館展示室及びコンピュータ室

14:00~17:00

(4) コンピュータを利用した国文学の授業の一形態 —人麻呂歌集の復元—

吉村 誠(山口大)

[概要] 現在、国文学の授業として行っている万葉集のデータ処理を中心とした授業実践を報告する。

(5) コンピュータを使った「英語学」の授業

丸谷 満男, 稲木 昭子, 高尾 典史(追手門学院大)

[概要] 英語学の文献をデータベース化し、電子化辞書を作成、その有効性を機械翻訳でテストする。

(6) 電子化テキストの作成と活用

沖 裕子(信州大)

[概要] 現代日本語のフルテキストデータベースを個人レベルで構築し活用するに際しての問題点を述べる。

(7) ナイフ形石器の多属性分析 —長野県茶臼山遺跡出土石器を例として—

高見 俊樹(諏訪市教育委員会)

[概要] ナイフ形石器の多様性の実態を明らかにするために、統計学的手法を用いて分析したので報告する。

学会カレンダー(Ver. 2.0, '94)

1994年4月7日～9日	ICEMCO '94, 4th International Conference and Exhibition on Multilingual Computing (Arabic and Roman Script). London, England. Contact: Ahmad Ubaydli, ICEMCO '94, Centre of Middle Eastern Studies, University of Cambridge, Sidgwick Avenue, Cambridge CB3 9DA, U.K., Phone: +44(223)334749/335106, Fax: +44(223)335110. E-mail: au100@phx.cam.ac.uk
1994年4月11日～13日	Teaching and Language Corpora 94, Lancaster University, U.K. TALC 94 Contact: Department of Linguistics, Lancaster University, Bailrigg, Lancaster, LA14YT, U.K. E-mail: talc94@lancaster.ac.uk
1994年4月12日～14日	Association for History and Computing UK Conference, Hull Contact: Don Spaeth, CTI Centre for History, University of Glasgow, Glasgow G12 8QT, U.K. E-mail: d.spaeth@glasgow.ac.uk ALLC/ACH '94. Joint Annual International Conference of the
1994年4月19日～23日	Association for Literary and Linguistic Computing and the Association for Computers and the Humanities. La Sorbonne, Paris, France. Contact: Andre Salem and Maurice Tournier, CNRS-INaLF, Lexicométrie et textes politiques, Ecole Normale Supérieure, avenue de la Grille d'Honneur, F-92211 Saint-Cloud, France. Phone: 00+33+1+47.71.91.11, Fax: 00+33+1+46.02.39.11
1994年5月4日～6日	MEDIA active: 'Harnessing Multimedia for Higher Education' Contact: Julie Colligan, Commercial Development, Liverpool John Moores University, 2 Rodney Street, Liverpool L3 5UY, U.K. Tel: 051-231-3370/3569 Fax: 051-707-0199
1994年5月18日～19日	Educational Testing Service Conference on Natural Language Processing Techniques in Assessment and Education. Contact: Chauncey Conference Center, Educational Testing Service, Rosedale Road, Princeton, New Jersey 08541, U.S.A. Corrine Cohen, Mailstop 16-R, ETS, Phone:609/734-1108. Eleanore DeYoung, Mailstop 17-R, ETS, Phone:609/734-5834 E-mail: edeyoung@rosedale.org
1994年5月20日～23日	Tenth Computers and Writing Conference, University of Missouri, Columbia, Missouri, U.S.A. Contact: Eric Crump, 231 Arts & Science, University of Missouri, Columbia, MO 65211. E-mail: lceric@mizzoul.bitnet or lceric@mizzoul.missouri.edu

編集後記

今回、はじめて編集のお仕事をお手伝いさせていただきました。短い期間にもかかわらず、投稿していただいた方に心より御礼申し上げます。今回は特に文系の諸分野で、ご活躍されていらっしゃる方々より原稿を頂戴いたしました。また、編集にあたりまして、複数の方々に突然お手紙や電話を差し上げましたことを、ニューズレターの発刊が遅れましたこととあわせて、お詫びいたします。(WATA)